

# 本校における外国人講師の授業について

英語科 西 野 貴 子

## 1 はじめに

平成6年度よりの新学習指導要領には国際性を養うことがその基本方針の一つに挙げられ、外国語の目標も「外国語を理解し、外国語で表現する能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てると共に、言語や文化に対する関心を高め、国際理解を深める。」と掲げられた。英語教育の使命は従来にも増して大きくなってきている。本校では比較的早くから、裏日本という地理的条件の不利と石川県人の消極的というか、おっとりしているという性格を考慮して、生徒を積極的にするのに何かよい策はないかと思いを重ねてきていた。そこで、次のようなことを試みた。ある意味では、国際性につながっているといえるかも知れない。

まず、昭和48年2月、アメリカのロータリークラブからの交換留学生を県内で最初に受け入れてみた。彼らから、授業の中で生の英語を聞かせることが出来るようになった。以後、カナダ、オーストラリア、スウェーデンの各国からも受け入れ、現在に至っている。

次に、交換留学生の受け入れと並行して、本校独自に英語II Aに外国人講師を採用し、授業を行なってみた。しかし、この企画は1年半で中止になった。

次に平成2年4月より文部省の英語担当講師採用計画が出され、本校も計画を提出したところ、予算が認められた。外国人講師を依頼し、現在、チームティーチング方式で試行2年目に当たる。

ここでは、経過を順に追いながら、授業の実践例を挙げ、経験から得たことを述べてみたい。

## 2 交換留学生の場合

### (ア) 交換留学生の扱い

交換留学生なので、厳密な意味では外国人講師とは言えない。しかし、本校では外国人講師並みに授業中は手伝ってもらったので、あえて、経過の一部として入れた。

交換留学生は1年生のクラスに入り、2年生に進級することになっている。外国人学生がクラスに入ると、まず、生徒たちが一生懸命に英語を使おうとする。相手に自分の言った英語が通じた時の喜びは、だれしも経験しているように、このうえないものである。このように生徒には、大いに刺激を与えていることになるし、また国際親善にも目を向けさせていることになる。

普通は、留学生は1週間の時間割りの内、3分の2は授業を選択で受けるが、そのうち所属クラスの英語の時間は全部出席しなければならないことにしている。英語の授業では読み、語句説明、自国の風俗習慣の紹介などで手伝って貰う。他の空き時間は日本語のレッスンを受けるか、場合によっては他のクラスの英語の授業に連れて行って、手伝って貰うこともある。アメリカ人とオーストラリア人の2人の交換留学生が同時にいた時は、アメリカ英語とオーストラリア英語の違いが生徒たちにもよく解り、勉強になった。

### (イ) 交換留学生との授業

次の Teaching Plan は昭和58年11月、本校の第11回高校教育研究協議会で行なった研究授業で、カナダからの交換留学生 Mr. Sean Mc'Guire をアシスタントとして行なった英語Iの授業例である。

## Teaching Plan 1

Instructor : Takako Nishino

I Date : November 12, 1983

II Class : 1-C Class

III Text : The Crown English Series, Book 1, Lesson 12

“From Aesop’s Fables” p.103 1.1~p.104 1.7

IV Major Aims :

A. To introduce two Aesop’s fables

B. To help the students learn the use of new words and structures

V Periods allotted : 4 (this being the first period)

VI Items to be stressed :

A. Pattern : A reflexive pronoun

It is Tom that broke the window.

B. Phrases : over and over, be said to be, disguise oneself, at grass, get someone into trouble, never...but..., by day, by night, during the night, in the daytime

VII A. Review Material : Key points from Lesson 11

B. New Material :

Here we have five fables which have been told over and over for more than 2,000 years. Aesop is said to be the author of these fables, but we do not really know much about him or how these fables were collected.

\* \* \*

A WOLF thought that by disguising himself he could get enough to eat. He put on a sheepskin to trick the shepherd and joined the flock at grass without being discovered. At sunset the shepherd shut him with the sheep in the fold and blocked the entrance. Then he felt hungry, so he picked up his knife and killed an animal for his supper. It was the wolf that he killed.

★ Pretending to be someone else can get one into serious trouble.

\* \* \*

A BIRD in a cage at a window used to sing during the night. A bat which heard her came up and asked why she never sang by day, but only by night. She explained that there was a good reason : she was caught while she was singing once in the daytime, and this had taught her a lesson. ‘One must be careful before one is caught, not after,’ said the bat.

★ It is too late to be sorry after you have let things go wrong.

## Teaching Procedure in Detail

### 1 Review

Oral Composition of the Last Lesson (Key points)

a あの人は本当に70歳かしら。

b 喉が乾いた。

### 2 Presentation of the New Materials

#### 1.Oral Introduction (books closed)

All of you know the name of Aesop. Yes, he is a Greek writer of such fables as the

fox and the grapes, the ant and the grasshopper, and so on. Today we are going to learn two lessons from his fables.

A wolf was hungry, so he dressed himself in a sheepskin, and joined a flock of sheep. After dark, the shepherd became hungry, and killed one of the sheep for his dinner. In fact, the shepherd killed the wolf! The moral of the story is that pretending to be someone else can sometimes lead to a serious situation.

One more story. There was a bird who usually sang at night. A bat asked her why. She answered that it was because she was caught while singing in the daytime. The moral of the story is that often repentance comes too late.

## 2. Structural and Grammatical Introduction

- a. I enjoyed myself at the party. = I had a very good time at the party.

You	yourself
He	himself
She	herself
We	ourselves
They	themselves

This “~self” is called a reflexive pronoun 再帰代名詞.

- b. Tom broke the window yesterday.

It was Tom that broke the window.

In this sentence the subject “Tom” is emphasized.

It was the window that Tom broke yesterday.

In this sentence the object “the window” is emphasized.

Like this we can emphasize the adverb “yesterday,” too.

It was yesterday that Tom broke the window.

## 3 Reading

1. Reading for comprehension

- a. Silent reading by the students

- b. Summarization

Each student summarizes each paragraph in Japanese.

- c. Explanation by the teacher

P.103 1.1 over and over = again and again

1.2 be said to be = It is said that Aesop is the author of these fables.

1.6 disguise himself = change into another person or in this case, another animal.

1.7 put on = wear ↔ take off  
trick = deceive (だます)

1.8 at grass = eating grass

1.12 It was the wolf that he killed. (羊飼いが殺したのは狼だったのです。)

1.14 get into serious trouble (人に迷惑をかける)

1.16 used to = いつも.. していた。

1.17 come up = come near

P.104 1.1 never...but... cf. not...but...

by day, by night, during the night, in the daytime

Be careful what has an article and what has no article.

1.5 not after (one is caught.) "One is caught" is omitted.

## 2. Reading aloud

- a. Pronunciation of new words after Sean
- b. Model reading by Sean
- c. Choral reading
- d. Individual reading

## 4 Practice

### 1. Oral composition

- a. 昨日成田空港に到着したのは米大統領のレーガンさんでした。
- b. 私はきのうその会議に欠席しました。

### 2. Questions by Sean and Answers by the students

- a. How did the wolf trick the shepherd to join the sheep without being discovered?
- b. Did the wolf succeed to eat the sheep?
- c. What the shepherd killed for his dinner?
- d. Did the bird in a cage sing in the daytime?
- e. Why did she sing only at night?
- f. What kind of lessons do you learn from these fables?

## 5 Consolidation

分科会の反省会で、この授業に対して次のような感想、質問があった。

①節や句を教えず（触れずに）生徒が理解出来る点が羨ましい。

（注：反省として後日この点を復習で触れてまとめておいた。）

②自分の日々の実践を反省させられる思いがした。一つには自分の生活の中で英語の発話能力を高めているかどうか。また、一つには、生徒の学習に対する興味を引き出し得ているかどうかというあたりで。このような授業を見せられると、ついつい、「生徒の能力が高いから出来るのだ」といってしまいがちだが、そういつて片付けてしまおうとする自分をいましめねばと思っている。

③交換留学生の質問は適切なものであったが、あれは教師が準備したものなのか、それとも留学生に任せたのか。

（注：この授業の場合、教師が準備したが、ときどき全く留学生に任せて質問して貰うこともある。日本人の視点と違う質問を考えてくれて面白いことがある。）

（ウ）効果

このように交換留学生に手伝って貰って、Reading, Questions and Answers, Composition, 時には状況等の説明を行なうことが出来た。たった一人外国人がクラスに入っただけで雰囲気は明らかに異なり、生徒に国際的視野を持たせるという意味ではプラスになると思う。しかし高校卒業、または在学中に日本に来るので、文法的に難しいことを尋ねるとこちらの満足のいく答えが得られない。そこで受け入れは継続するものの、毎年とは限らない事も含め、このあたりを改善していきたいと思っていた。

### 3 外国人講師の場合

#### (ア) 外国人講師の導入

2 (ウ) で述べた事を反省して、次に試みたのは、本校独自に英語ⅡAに外国人講師を採用しようということになった。実現するには金沢大学へ書類を提出し、非常勤講師の予算を得ることである。次のように理由(抜粋)を付して提出した。

- ①高校を在学中又は卒業した交換留学生の知識だけでは全面的に対応出来ないことがある。
- ②英語ⅡAには文部省検定の教科書がない。
- ③日本人教師と外国人教師との間には次のような相違点が見られる。
  - (a)生活習慣、風俗等の違いによる発想や物の見方
  - (b)身振り、しぐさなどを交えた生きた英会話
  - (c)言語習慣から発するつなぎの言葉——英文と英文の間に挟まれる英会話独特のあい言葉など

以上のような相違点は外国人教師と生徒との直接の交流によってのみ体得されるものである。

- ④臨教審(61年4月)の国際化時代の対応と外国語教育の見直しに触れた答申に「世界の中の日本人」を21世紀のための目標として掲げ、国際社会に貢献することの出来る日本人を育成することを目指しているとある。

#### (イ) 授業時数及び授業形態

このような主旨で昭和61年5月提出し、創造的な言語活動をはかるべく外国人講師の導入を実現させ、昭和62年4月～昭和63年9月まで実施した。ただし、要求は2年生と3年生の2学年分で出したが、認められたのは1学年分3時間だけだった。この授業は2の項とも4の項とも異なり、外国人講師一人に任せる形態をとる授業であったのが、その大きな特徴だった。その年度は3年生を担当してもらうことにした。というのは、3年生なら、外国人講師の授業についていけるだろうという期待があった。制度が定着したら、もう少し予算をとり、2年、1年と増やすつもりもあったからだ。

1年目はオランダ人講師を迎えて始めた。オランダの大学を卒業後、金沢大学で陶器のことを研究している大学院生であった。教材を適当に用意してきて、ヒアリングを中心に授業を行なった。1学期はうまく生徒も授業にのつたが、2学期になって受験にヒアリングがいない生徒たちは授業中騒ぐか、内職をするものが出だした。3年生ということであらかじめこのことを予期していたので、2学期半ばからクラスをヒアリングのいる生徒といない生徒とに二分して、授業をおこなった。3学期は3年生は特別時間割りなので、英語ⅡAは設けないので授業はない。このように変則的にすることは、本来の目的にそぐわないが致し方なかった。

2年目はこのオランダ人が帰国したので、大学卒業後、日本へ来ていたオーストラリア人講師を迎えた。この年度も3年生でもう1度やることにしたが、今度は最初からクラスを二分して授業をおこなった。しかし、10月から、講師自身が東京へ日本語の勉強に行くという理由で来られなくなり、後続の講師のメドがたたないまま授業は立ち消えになった。ヒアリングのいないクラスを担当していた先生が後を続けた。

#### (ウ) 中止になった原因

この外国人講師の授業がわずか1年半でダメになった原因を考えてみた。

- (あ) 講師自身の止める理由が実ははっきりしない。
- (い) 英語を母国語とする金沢在住の外国人の絶対数が少なく、簡単に適任者が見つからない。

(う) 時給 (2,130円) の問題。

(え) 事務手続き上での資格の問題。(一人で授業するので、教師としての免状が必要)

(お) 授業を受ける生徒側 (3年生であること) に問題があって、外国人講師が指導しにくい。

(a)例えば、いくら問いかけても積極的に答えてくれない。あてるとやっと答えるというように、日本人特有の消極性。

(b)生徒の態度が悪く、授業にのってこず、勝手に別のことをやっていたことが、外国人講師の気分を害した。

#### 4 文部省の英語担当講師の場合

##### (ア) 英語担当講師の導入

上記の原因でうやむやになったまま時が過ぎた。平成2年1月、文部省より「英語担当講師採用計画」が一般の非常勤講師の枠とは別に出された。この「英語担当講師」とは「外国人あるいは海外在留経験を有する日本人等のうちからコミュニケーション能力に極めて卓越した者であり、英語の授業に参画させ、補助的指導を行なう者」という条件であり、いわゆる都道府県で招致しているCIR (Coordinator for International Relations)や、AET (Assistant English Teacher)とは、その職務、資格要件で本質的に違っているが、ともあれ、形の上では一種のAETであると考えられる。ただ、前項3のように必ずしも教師としての資格はなくてもよい、時給も税込 3,500円とわかり、本校でも計画書を提出してみることにした。

提出書類の教育指導計画の概要として、「英語Ⅰ及び英語Ⅱの時間に1時間ずつ担当する。特にリーダーを中心に教師と外国人講師と生徒との三者一体の授業を目指す。生徒の発話を促す機会を出来るだけ多くし、英語でのコミュニケーションを促進する」と記し、週6時間で210時間要望したが180時間で認められた。そこで前回の失敗を繰り返さぬために、1年生と2年生で授業することにした。今回は、私立の大学で先生をしているアメリカ人の奥さんを講師として依頼することが出来た。

##### (イ) 授業を英語Ⅰ、Ⅱ (リーダー) にした理由

AETとのTeam Teachingは英作文に充当している学校もあると聞いているが、今回リーダーの授業のTeam Teachingとして提出したのは、次の3つの理由による。

①校内のカリキュラム委員会でカリキュラムの見直しをした時に、英語ⅡAを昭和64年から廃止した。

②英語ⅡCの時間では、日本語の充分理解出来ない外国人に日本語の微妙なニュアンスがわからなくて貰えないのではないか、英語としてたとえ正しくても果たして100%その通りに伝えることは出来ないのではないかという危惧がある。

③英語ⅡBや文法ではせっかくの外国人講師の授業として勿体ない。

##### (ウ) 具体的な授業の計画と授業例2つ

平成2年度第2学年の英語Ⅱ (リーダー) で実施したTeam Teachingの計画とその状況は次のようである。

英語Ⅱは週3時間で実施しているが、その内の1時間をTeam Teachingに当てる。

4月～12月 Sun Shine II L.4～Reading 5 (pp.35～217)

1月～3月 COAST TO COAST 1, 2 by Longman,

THINK TWICE by Cambridge University Press

50分の授業の内、はじめにWarm-upとしてGreetingの後簡単なQuestions and Answers

を必ず設け、40分～45分は教科書を使用して授業し、残り5分～10分は全員が必ず1度は英語を口に出して言うように配慮して、ゲームの時間として取った。ゲームは、しりとり、歌、クイズ、デイクテーション、Hangman, Simon Says などである。

12月に教科書が終わったので、1月～3月までの間、COAST TO CAOST 1, 2, THINK TWICE を参考にし、その中から適宜教材を選んで作ることにした。その理由は、

- ① COAST TO COAST は colourful で conversation が situation によって選べること。
- ② 授業時数が少ないので、どこから始めて、どこで終わってもよいものを選べる。
- ③ 書いてあることが少なく、つまり文字が少なく、絵から色々想像出来、それでいて、一つの会話パターンになっている。

このように応用がきき、creative なところが気に入り、アメリカ人講師の推薦もあったので採用した。主に選んだ内容は、簡単だが日常よくあり、それでいて、将来生徒たちが遭遇するかもしれない状況のもの、例えば、電話、道案内、空港、税関での会話などである。THINK TWICE はクイズ形式で時間調整に使用した。なお、3学期はゲームは中止した。

大体、Team Teaching は1週間のうちのある1日の午前2、3、4限と連続した3時間だったので、最初のクラスでうまくいかなくても、2時間目、3時間目にはその箇所をすばやく手直しして行なったが、そういう箇所は殆どアドリブで行なった。授業中、急に思いついて説明してもらうこともたびたびあったが、息があったせいか、たいていうまくいった。

次に授業例2（教科書を使用したもの）、授業例3（COAST TO COAST を使用したもの）を載せる。

\* \* \* \* \*

### Teaching Plan 2

Instructors : Janet Carruthers and Takako Nishino

I Date : May 30, 1990

II Class : 2-B Class

III Text : Sun Shine II Lesson 4 Part 1 (pp.76～79)

IV Major Aims :

To help the students understand the content of Part 1

To help the students the use of new words and the structures

V Period allotted : 5 (this being the 2nd period)

VI Items to be stressed :

A. Pattern : S + V(be) + C (that 節) Our argument is that ~.

B. Words and Phrases :

decorate the truth, appeal to, follow along, pride oneself on

VII A. Review Material

Andy A.Rooney, a famous American columnist, criticizes two aspects of American life-style. The excuse people make when they do what they should not, and the use of such expressions as "Thank you" and "Have a nice day."

[1]

I saw the driver of a truck throw a paper cup out the window onto a New York street yesterday and it angered me. I was driving myself, so I pulled up beside him at the next light and shouted, "You dropped something back there!"

He got my message and he gave me one in return.

“What do you want me to do---take it to the dump? This whole town’s a dump.”

In other words, everyone else was doing it, why shouldn’t he?

“Everyone else is doing it” seems to be the most common excuse most of us give ourselves for doing something we really shouldn’t do. If enough people do something that’s wrong, it often becomes common practice.

The college football season is starting, and this is one area where problems frequently occur. College teams should be made up of students who come to school for an education and who play football for fun. However, when one of the teams in a hot college league lowered its standards just a hair to admit a high school boy who failed biology but ran the hundred-yard dash in 9.8 seconds, amateur football was done for in that league.

#### B. New Material

In the news business, the newspaper that decorates the truth and prints the stories that appeal to our feelings will always sell the most papers. It is difficult for other newspapers not to follow along on the theory that “everyone else is doing it.”

There is always a dilemma among network television news organizations. If one of them ever decides to lower its journalistic standards and give people what they’d like to watch instead of what they ought to know, that network will very soon take the major part of the audience. If that happens, will the others follow? They probably will, and that will be the end of high quality television news. It has already happened in local television news in many cities.

I don’t know why “everyone else is doing it” is such an attractive idea to a nation that prides itself on its individuality as ours does. We start leaning on the idea when we’re kids. If our mother tells us to go to bed at eight thirty, our argument is that we ought to be able to stay up until nine because “everyone else does.” Right or wrong doesn’t enter into our thinking. Not only that, but if a mother learns that a lot of kids actually do stay up until nine, she’s more apt to let hers do it too.

This isn’t much of a column today, but I wanted to get one out in a hurry. I’ve been reading some of the other columnists and everyone else is doing it.

#### Teaching Procedure in Detail

##### 1 Greeting Including Questions and Answers

##### 2 Review

(1) Reading the first part of Part 1 (p.76 1.6 ~p.77 1.8)

(2) Oral review (books closed)

Andy Rooney, a famous American columnist talks in this section about the excuses people make when doing things they shouldn’t. “Everyone else is doing it” is a typical response you will get if for example you confront someone who has thrown litter on the street. “Everyone else is doing it” is the reason many colleges give for admitting students to play football even though their grade point average is bad.

Questions: 1) Who is Andy Rooney?

(He is a famous American columnist.)



- 2) What phrase do Americans love to use?  
(They love to use "everyone else is doing it.")
- 3) What happened when one college lowered its standards to admit a student who was a good football player?  
(Other colleges did the same and college football was done for in that league.)

### 3 Presentation of the New Materials

#### (1) Oral introduction (books closed)

Andy Rooney talks about the excuses people make when doing things they shouldn't. "Everyone else is doing it" is the excuse news businesses make when writing articles in newspapers that appeal to the reader in order to sell more. Children give the reason "everyone else is doing it" when trying to convince Mom they should be able to go to bed at 9:00 p.m. instead of 8:30 p.m. Even though Americans pride themselves on individuality, "everyone else is doing it" as a phrase that seems to be well accepted.

#### (2) Questions and answers

- 1) Name two ways people use the phrase, "Everyone else is doing it."  
(News businesses who write news articles to appeal to the reader.)  
(Children wanting to stay up later at night.)
- 2) Why is it strange that "everyone else is doing it" is such an attractive idea in America?  
(Because Americans usually pride themselves on their individuality.)

### 4 Reading

- (1) Listening to AET's reading for comprehension (books open)
- (2) Explanation of grammatical points by the teachers

P.77 1.9 decorate the truth = make less harsh, cover up  
appeal to = attract

P.78 1.2 follow along = do the same thing

1.11 local television news

CBS (Columbia Broadcasting System)

NBC (National Broadcasting Company)

ABC (American Broadcasting Company)

1.15 What does "the idea" stand for?

(It stands for the phrase "everyone else is doing it.")

as ours does = as our nation prides itself on its individuality

1.17 our argument is that ~ See P.84, Key Points, Sentence

1.19 What's the real meaning of 'that'?

(It means the sentence "Right or wrong" doesn't enter into our thinking.)

- (3) Reading aloud with comprehension (Individual and Choral Reading)

### 5 Consolidation

\* \* \* \* \*

### Teaching Plan 3

Instructors : Janet Carruthers and Takako Nishino

I Date : February 5, 1991

II Class : 2-A Class

III Text : Coast to Coast 1 "A Hotel Room"

Coast to Coast 2 "A Telephone Message"

IV Major Aim : To practice relaying a telephone message to another person

V Periods allotted : 6 (this being the 3rd period)

VI Items to be stressed : This is ... from .... Could he call me .....?

VII A. Review Material : "A Hotel Room"

A : Pacific Hotel. May I help you?

B : Yes. I'd like to reserve a room, please.

A : Certainly. For when?

B : April 29th.

A : Yes, that's fine. May I have your name, please?

Here are some words you can use:

A.C.T. Theater	reserve two seats	March 1st
Giorgio's Restaurant	reserve a table for two	10 o'clock tonight
Sassoon's Hairstylists	make an appointment	Thursday morning at 9 o'clock
Budget Rent-a-Car	rent a car	November 1st, for the weekend

B. New Material : "A Telephone Message"

Judy : Good morning, Quest. Judy speaking.

Terry : Hello. May I speak to Gino, please?

Judy : I'm sorry, he's out at the moment, but he'll be in this afternoon. May I take a message?

Terry : Yes, this is Terry Stern from Fotografics. Could he call me at work this afternoon, or at home tonight?

Judy : OK. Could I have the numbers, please?

Terry : My work number is 451-6201, extension 42, and my home number is 326-4365.

Judy : Thank you. I'll give him the message.

Terry : Thank you. Goodbye.

Judy : Goodbye.

### Teaching Procedure in Detail

A. Review

Students' role play of "A Hotel Room" without looking at the handouts.

B. Presentation of the New Material

1 Demonstration by the American teacher and the Japanese teacher twice.

2 Questions and answers

(1) Who called Judy? (Terry Stern from Fotografics.)

(2) Who did he want to speak to? (To Gino.)

(3) Where is Terry going to be this afternoon?

(He is going to be at work this afternoon.)

### C. Reading

#### 1 Reading for comprehension

a. Model reading by the American teacher

b. Explanation of the situation and, especially, of the pattern, 'This is ....from....'

c. Choral Reading

#### 2 Demonstration on the platform by as many students as possible

### D. Practice of the other two messages

#### 1 Understanding the two messages by silent reading

Reconstruct the telephone conversations from messages below.

Then practice giving and taking messages.

Telephone Messages	Telephone Messages
MESSAGE FOR : Judy	MESSAGE FOR : Gary
WHILE YOU WERE OUT :	WHILE YOU WERE OUT :
Howard Scully	Jim Brady
FROM : Kodak	FROM : Genico
CALLED <input checked="" type="checkbox"/>	CALLED <input checked="" type="checkbox"/>
CAME BY <input type="checkbox"/>	CAME BY <input type="checkbox"/>
MESSAGE :	MESSAGE :
Come by and pick up your film	Meet him for dinner tomorrow night at 1 P.M. in lobby of Yankee Hotel
TELEPHONE NUMBER :	TELEPHONE NUMBER : 472-1051
MESSAGE TAKEN BY : Gary	(Yankee Hotel)
DATE : 5/5	MESSAGE TAKEN BY : room 86
TIME : 9 A.M.	Gino
	DATE : 5/6
	TIME : 4 P.M.

#### 2 Questions and answers

Each message is asked by the following questions to let the students understand each situation.

(1) Who called?

(2) Who did the caller wanted to speak to?

(3) Who took the message?

#### 3 Demonstration on the platform by as many students as possible

### E. Consolidation

以上2つの Teaching Plan からもわかるように、このような展開で授業を行ってきた。教科書使用の時は、内容によって、アメリカ人講師は日本人講師との呼吸を見計らって、本文に即して適切な解説をしてくれた。例えば、構文上、言い回しのわかりにくい箇所を平易な英語にしたり、CBS, NBC, ABC などアメリカで放送されているテレビ会社のこと、スーパーマーケットの日米の違い、アメリカの町の様子、バレンタインの習慣の違い等、活字のアメリカが生き生きと講師の口を通して語られ、生徒たちの理解の手助けとなった。“Coast to Coast”ではアメリカ人講師と日本人教師のやりとりは、実際感情を込め、イントネーション、ジェスチャーに注意して演技した。アメリカ人講師もこの時はとても生き生きとしていて、こちらもついつられて演技に力が入った。生徒たちは最初は照れていたものの、回を重ねるうちに度胸がつき、アドリブさえ言えるようになった者もいた。しかしまだまだお粗末な表現力であることはいうまでもないことである。もう少し授業回数があったらとつくづく思った。こうして1年間実施してみて英語教育の目的のコミュニケーション能力、発話能力を高めることは大変難しい事であると思い知らされたが、今回の経験は次回の授業への大きな土台になってくれるとも思った。

### (エ) 生徒の感想

1年間実施してみて、生徒の方からの感想又は手応えを得るためにごく簡単なアンケートをとってみた。アンケートの内容は次のようなものである。回答者は125人である。

チームティーチングについて、次のアンケートに答えて下さい。

1. Janet 先生の授業を1年間受けてみてよかったと思いますか。  
1 よかった                      2 よくなかった                      3 どっちとも言えない  
その理由を書いてください。( )
2. Listening の力はついたと思いますか。  
1 ついた                      2 つかない                      3 どっちとも言えない
3. Speaking の力はついたと思いますか。  
1 ついた                      2 つかない                      3 どっちとも言えない
4. Reading の力はついたと思いますか。  
1 ついた                      2 つかない                      3 どっちとも言えない
5. Writing の力はついたと思いますか。  
1 ついた                      2 つかない                      3 どっちとも言えない
6. あなた方の学年はリーダーでチームティーチングをしましたが、授業の形式、内容について答えて下さい。  
1 リーダーでよい    2 サイドリーダーでよい    3 英作文でよい  
その理由を書いてください。( )
7. どんな授業が希望だったか、具体的に書いて下さい。( )

1. の回答で1「よかった」と答えた者の中から主な理由を拾ってみる。

- \* 授業が楽しかった。
- \* 生の英語を聞くことが出来たから。自分でその場で話そうという勇気が持てたから。
- \* 週1回気分転換になった。授業にリズムがついてよかった。

		男	女		男	女		男	女
1	1	34	34	2	13	0	3	30	14
		68			13			44	
2	1	19	21	2	31	10	3	27	17
		40			41			44	
3	1	4	8	2	44	25	3	29	15
		12			69			44	
4	1	4	10	2	35	15	3	38	23
		14			50			61	
5	1	3	5	2	39	18	3	35	25
		8			57			60	
6	1	44	25	2	16	10	3	6	6
		69			26			12	
							4	11	7
								18	

- \* 異文化を肌で体験出来たし、英語で話して意味がわかったり、通じたりしたら、嬉しかった。
  - \* 会話＋ヒアリングの時間そのものがあったことがよかった。
  - \* 英語というものを読んで理解するだけではなくて、自分でしゃべれるようになりたいと思えるきっかけになった。
  - \* natural な発音を生で聞けたし、話している内容を聞き取らないと授業の内容がわからなくなることもあり、必死で聞いたので、ヒアリングの力をのばすことが出来た。又話すという点でも勉強になった。
  - \* 小学生の時、英会話の先生がカナダ人でとても怖い印象だったが、外国人に対する抵抗が無くなってきたように思われた。
  - \* 生の英語を聞くことが出来たということが大きな理由であるが、アメリカ人独特の大きさや明るさに触れることが出来て、大変嬉しかったし、日本人の特徴について改めて考えさせられた。
  - \* 外国の人と話す機会はなかなかないので、週一度の Janet 先生の授業は大変貴重だった。外国の慣習などもいくつか分かりとても勉強になったと思う。
  - \* 最後の10分間の有り難みを味わった。アメリカ英語の現実を垣間見た感を受けた。
1. の回答で2「よくなかった」と答えた者のなかには女子が0人だったことは、このアンケートから得た大きな特徴といえる。やはり女子の英語好きを反映しているのだろうか。2と答えた理由をあげる。
- \* 週1回、しかも50分間生の英語を聞いたからといって、会話力がつくものでもなく、英語会話を毎日聞くほうがずっと楽しいし、また、欧米の文化をより正確に知ることが出来ると思う。
  - \* もともとヒアリングがだめなので、あのくらいの授業数をうけてもなんにも上達しなかったので無意味だった。
  - \* 一週間1時間程度ではあまり効果がない感があり、授業の題材もたいして面白くなかった。
  - \* リスニングの力が不十分で殆ど聞き取れずに終わった。

\* 何の役にも立たなかったので、真剣に受けることが出来なかった。

\* 授業回数が少なく、何をやっても中途半端だった。

1. の回答で3「どっちとも言えない」と答えた理由をあげてみる。

\* 授業によって英語の力をつけようとするのであれば、あまりに時間が短い。

\* 少しはヒアリングの力がつくと思って真剣に聞いていたのに、依然ヒアリングの点が全然とれず失望している。ただ、発表の機会があり、日頃よくわからない友達の面白さに触れられて楽しかった。

\* 息抜きの時間にすぎなかった。

\* 中途半端で何の力をつけようとしているのかよくわからなかった。

\* ヒアリングの力が少しはついたかもしれないが、毎日聞くラジオ英会話の方が効果がありそうに思ったから。でも楽しかった。

\* Native の英語を聞いたのはよかったが、時間が少なかったので、効果があったと思えない。

このようによしとするもの、そうでないものと意見は色々である。「よくなかった」「どっちとも言えない」と答えた者の中にも、授業は楽しかったが、時間的少なさを理由に効果の点で否定的、中間的に答えたと思われる者がおり、時間を増やす、つまり継続して学習すると又考えも変わるかもしれない。英語が得意、不得意によっても意見は違ってくるが、全体として授業そのものに対する生徒の感想はよかったと思うものが多いと結論を出してもよい。よしとする者の中には冒頭に掲げた外国語の目標に非常に近い理由を挙げた生徒が何人かいたということを考えれば、この授業は1年間決して無駄ではなかったといえる。

2～5については、リスニングとスピーキングの力がついたものの、リーディング、ライティングの力はつかなかったと答えた生徒が、圧倒的に多く、この点が今後考えていかなければならない所だと思う。

また、授業を行なう教科は圧倒的にリーダーが多かった。4の数字は回答無しである。リーダーと答えた理由として、

\* 英語を全体的にみて楽しむ時間であってほしいから。

\* 作文、リーディング、ヒアリングと様々な要素を均等に盛り込んでいるため。

\* リーダーのテキストの内容の多様性に合わせて Janet 先生の色々な考え方、アメリカ人の考え方を知ることが出来たから。

また、7の授業希望として、

\* 英語でディスカッションをする。一つの議題について拙い英語でもよいから意見をいう。自己表現の力が付き、海外でもうまくやっていけると思うので。

\* 辞書にでていないスラングを教えてほしいかった。

\* 物語を一緒に読む。

\* 4、5人の班で自由に英語で会話する。

\* 授業というよりもっと打ち解けた形で出来たらよいと思う。(机を下げて、椅子だけで話すとか、..)

\* Janet 先生の歌がもっと聴きたかった。

ディスカッションを希望していた者が数人おり、生徒たちの拙いながらやってみたいという意欲がうかがわれた。本校では新指導要領ではコミュニケーションAを実施することになっているが、発展させてコミュニケーションB、Cの内容も入れてみるよう、一考の余地がある。

(オ) (ウ) と (エ) からわかったこと

1年間の Team Teaching の経験と生徒の感想から気づいたことをまとめてみる。(参考：AETとつきあう18章 p.156)

[良い点]

- i 生徒にとって生きた言語、コミュニケーションを実感させることが出来る。
- ii 少しでも意志を通じ合えた時の喜びは大きく外国語学習の動機づけとなり、学習意欲を高めることが出来る。例えば、成績のふるわない生徒でも発音、イントネーションがよいと讃められると意欲が出てくる。
- iii 考え方や習慣の共通、差異がわかり、国際理解へ一歩近寄る。
- iv 発音、イントネーション、ゼスチャーなどの重要性、意味がわかる。
- v 教師にとっても Native Informant としての意義は大きい。

[良くない点]

- i 都道府県のAETと違って、常勤しているのではないこと。教師及び生徒との接触はその時間だけに限られるし、講師が生徒一人一人理解する時間が少なすぎる。
- ii 常に次回の予定を一週間前に組んで授業の範囲とアメリカ人講師のやって貰う内容のおおまかな打ち合せを済ます必要があるので、教師側の負担が大変大きい。
- iii 当日は、授業直前の数分で打ちあわせをしてその日の授業に臨むので、最初の時間迄に手直しがきかない。やって見るしかない。

[授業のための留意点]

- i 各レッスンの目標を明確にしておく。
- ii 授業計画と方法・内容は日本人教師が積極的に作って打合せる。
- iii 生徒のつまづきの原因を外国人講師にもよく理解してもらって、克服するようにしていく。
- iv 普段の授業でも英語で生徒に語りかけ、外国人講師の時間が終わるとがらっと元に戻ることをないようにする。
- v 1時間をいくつかの部分に分けて生徒の集中力の焦点を変えながら授業を進める。
- vi 教師と外国人講師だけのやりとりを続けて生徒の参加のないのはよくない。生徒を外国人講師と直接接する機会をなるべく多くする。
- vii 事前の打ち合せと事後の点検、反省の時間をとるよう努力する。
- viii 二人三脚は呼吸が合わないとうまく行かない。相手の性格をつかんで授業を進めるようよく配慮しなければならない。

(カ) 今後の取り組みについて

こうして平成2年度は終わろうとしている時に、平成3年度の採用計画を提出することになった。生徒の感想と日本人教師の気づいた点をまとめて次のように書いて提出した。

「教育効果の概要」として、

- ① ネイティブスピーカーの発音、時には発想も生徒が直接学ぶことが出来た。
- ② 英語に対するモチベーションになった。
- ③ 英語のプラクティカルな側面にも注意が与えられ、実感として生徒が納得出来た。
- ④ 平成2年度のネイティブの人柄がたいへん良かったので、外国人恐怖、コンプレックスが最初の頃に比べて解消され、生徒も講師も授業を楽しく出来た。

「採用計画」として、

生徒が直接ネイティブスピーカーから吸収する機会が多いほど効果がある。どんな簡単な文でも口に出して言うのが困難であることは2年度に経験済みであり、しゃべる機会

を出来るだけ多くし、しゃべろうとする努力を生み出す動機づけが大切であると考え、1年と2年のリーダーを中心に教師、外国人講師、生徒の三者一体となった授業を目指し、チームティーチング方式により、週6時間（1クラス1時間）授業に参画させるもの。

こうして平成3年度も平成2年度と同額の予算がついた。現在、1年、2年とで他の先生方がチームティーチングを行なっている。

「英語学習はコミュニケーションを目指している。言語使用場面で自分の考えや感情がうまく相手に伝わっていくような生きた英語力の養成が急務である。」（英語授業を魅力的に p.29）とすれば、チームティーチングは教師の協力的指導によって授業の中で、このような目的を達成するための効率を高めようとするものである。単に「日本人教師が外国人講師と一緒に授業をする」（英語教育学概論 p.285）というとらえ方をしないで、コミュニケーションを目指し、さらには、コミュニケーションのもっと進んだ形である interaction を目指したいと思っている。1年目は進度の事を考えたので、あまりテキストを離れることはなかったが、今回は時間さえ許せばテキストを離れて、Coast to Coast や感情表現集のような題材をふんだんに扱っていきたいと思っている。

また平成2年、3年は学年進行で外国人講師との授業を入れたので、現3年生は1年間のみの経験となった。前項の授業希望でもあったように、ディスカッションが出来るようになるには、是非とも1年から3年までの外国人講師との継続授業が望まれる。とすれば、前回の失敗はくり返したくないが、やはり今後は3年生にも予算がついて、3年間継続して、チームティーチング出来ることが望ましい。

## 5. 事務上の手続き

新規の外国人講師には以下の事務上の手続きが必要であり、これには大半、英語科の教師があたる。

(1) 講師探し——知人、友人のつてで探す、滞日外国人の家族が望ましい。

(2) 講師該当者が見つかったら、次の書類を作成する。

① 履歴書（市販されているもので、本籍地の入っている用紙を使用する。）

（英文、日本文、写真不要）

（作成に当たって）

学歴 義務教育卒業後の入学・卒業（修了・退学）を順に記入する。

職歴 採用・移動・退職事項について年次順に記入する。

免許資格 免許資格の取得年月日、種類を記入する。

② 健康診断書（当校指定用紙、金沢大学保健管理センター）

③ 外国人登録証明書（写）

④ パスポート（写）

⑤ 非常勤講師に係わる教授（又は実習）許可申請書（指定様式）

（本校より石川県教育委員会教職員課へ）

⑥ 身元保証書（指定様式）（本人から法務省へ）

⑦ 資格外活動許可申請書（本人がしてくる）

（法務省）名古屋入国管理事務所金沢港出張所

⑧ 非常勤講師の委嘱承諾書（指定様式）（本人から金沢大学へ）

⑨ 印鑑の作成（カタカナのもの）（本人）



⑩銀行への振込み用紙（口座がなかったら開く）

6. 終わりに

交換留学生に始まり、文部省の外国人英語担当講師導入と実践までの経過、授業例を通して気づいた事を述べて来た。このまま英語担当講師制度が定着するものならそう願いたい、この企画は3年計画で進めているものだから、3年経過後一体どういう方向に落ち着くものか、今のところ、全く予想がたたない。しかし、現在、中学校、高等学校で実践しているその報告から、文部省もこの企画の定着を図り、さらには一校一人の常勤という都道府県なみの線に落ち着けば、現場で実際に外国人と触れる機会がそれだけ多くなるから、国際理解の一助となり、国際性を養う事を目標とする英語教育もより一層の充実があるものといえる。

参考文献：

The Crown English Series I	昭和58年	三省堂
Sunshine English Course II	昭和63年	開隆堂出版
Coast To Coast 1 & 2	Jeremy Harmer and Harold Surguine	Longman
高等学校学習指導要領	平成元年3月	文部省
英語授業を魅力的に	松畑 一、高塚成信共著	大修館書店
AETとつきあう18章	阿原成光、上原重一共著	三友社出版
英語教育学概論	高梨庸雄、高橋正夫共著	金星堂